

<「知るっば!久留米」 令和3年3月25日(木) 12:30~放送分>

高島野十郎 ～第4回～ 「高島野十郎の晩年」

<ゲスト：久留米市美術館 学芸員 中山景子さん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

今回は、『高島野十郎』をテーマに彼の生涯とその作品についてお送りします。

ゲストはこのかたです。

ゲスト:中山景子さん(以下「中山」)

久留米市美術館で学芸員をしております中山です。

よろしくお願いします。

坂本 いよいよ最終回の第4回目になりました。

本日は、『高島野十郎の晩年』をテーマにお話をうかがいたと思います。

中山 野十郎は戦後、東京の青山で暮らしていたのですが、

独身の気楽さもあって、日本各地に写生の旅に出かけました。

奈良や京都、東北、信州、秩父、福岡など、そこで目にした風景を絵にしています。

そして、70歳の頃、東京オリンピックの開催に向けた道路拡張工事により立ち退きを求められ、千葉県柏市に移り住み、そこで晩年を過ごしました。

坂本 野十郎の風景画は、たくさんありますよね。

特に見逃せない、中山さんおすすめの作品などはありますか？

中山 今回の久留米市美術館での野十郎展のポスターにも使用した「菜の花」という作品は、野十郎の風景画の中でも代表的な作品です。

黄色い菜の花が画面いっぱいに描かれた、とても美しい作品です。

坂本 本当にきれいな作品ですね。

黄色い菜の花が、数えきれないほどたくさん描かれていて、蝶も飛んでいます。

菜の花といえば、私は筑後川の河川敷に広がる菜の花畑を思い浮かべますが、この「菜の花」は、どこで描かれたのでしょうか？

中山 野十郎が75歳の時、関東の武蔵野に取材した作品です。
でも坂本さんがおっしゃるように、野十郎の頭の中には、
故郷の筑後川の河川敷に広がる菜の花畑が思い出されていたと思います。
野十郎が残した歌に「久々に筑紫の郷(ごう)に来てみれば 菜の花夢に 秋風のふく」と、
故郷の菜の花の思い出を詠んだ歌も残しています。

坂本 やはり久留米出身の野十郎の心には、
筑後川や菜の花というのがいつまでも残っていたんだろうなと思います。
特に、上京後の東京暮らしが長かった野十郎なので、
故郷の風景は懐かしく思い出されていたのでしょうか。
野十郎が好んだ写生地は、他にどんなところがありますか？

中山 奈良の古い寺院、特に薬師寺と法隆寺が好きだったようで、
「空の塔 奈良薬師寺」というタイトルの作品を描いています。
その作品は、三重塔の上部と青空がメインに描かれた清々しい作品です。
また、東北の雪景色も好んで描いています。
野十郎が描く雪は、今まさに降り積もっていると感じられるような臨場感があります。
雪の一粒一粒を白い絵具の大きさや濃淡を変えて描いているのですが、
その雪と空気の動きまで意識したのではないかと思います。

坂本 この「空の塔」は、私も好きな作品です。
塔を描くとき、普通は塔の下の部分や地面から描きそうなものですが、
この作品は塔の上半分だけなんですよ。
そして、どこまでも広がる空を感じるような作品になっています。
リスナーの方も気になっていると思いますのでおたずねしますが、
雪の絵や菜の花の絵など、野十郎の絵は本当に緻密に描かれていますが、
1枚の絵を仕上げるのにどのくらいの時間をかけていたのでしょうか？

中山 野十郎は、写生に行った土地で何日も過ごし、五感でその場の光や温度、
草花の匂いなどを感じとった上で、カンヴァスに向かったと思います。
そして、仕上げるまでに、作品によっては何年、何十年も、手を入れては眺め、また手を入れて、
という作業を納得がいくまで繰り返したようです。

坂本 何年も、何十年もひとつの絵に向かい合っていたということなんですね。
そんなに制作に時間をかけていたとは、すごい集中力とこだわりがあるんでしょうね。
私も素人ながら絵を描くのですが、
そんな長い期間、ひとつの作品に向き合うのはすごいなと感じました。
70歳を過ぎて移った千葉県柏市では、どのような晩年を過ごしたのでしょうか？

中山 柏市の田園の中に建てたアトリエにも野十郎の譲れないこだわりがあって、
まず、そこでの暮らしには、電気も水道もガスもありませんでした。
水は井戸を掘らせて、アトリエの周囲に畑を作って、質素な暮らしの中で絵に向かい続けました。

坂本 自然の中で人工物に頼らない暮らしが、野十郎の理想だったんでしょうかね。
電気もない暮らしは、今では不便としか思えないのですが…。

中山 でも、柏市のアトリエの周りに街灯も民家もなかったおかげで、
野十郎のアトリエの窓からは、月が綺麗に見えました。
柏市で月の美しさを知って、野十郎は本格的に月の絵を描くようになります。

坂本 野十郎の月の絵は、本当に静かな自然の中で、月光浴をしているような気持ち良さがありますよね。
月の光を自然のままに感じることができます。
光と闇という点では、「蠟燭(ろうそく)の画家・高島野十郎」とテレビで紹介されるくらい、
蠟燭の絵は有名になりましたよね。

中山 暗い背景に光が主役で描かれているという点では、月の絵と共通するところがあります。
蠟燭の絵は、個展でも発表されることはなく、親しい人に一人一人贈られた、特別な絵でした。
野十郎が描いた蠟燭の絵は、現在40点ほど確認されています。
その炎の揺らめきや蠟燭の長さなど、どれひとつとして同じものがない点が、とても興味深いです。

坂本 一匹狼の孤独な画家というイメージでしたが、
親しい人たちとの交流を通して描かれた蠟燭の絵もあるというのは、少し安心しました。
そして、野十郎は85歳で亡くなります。

中山 82歳頃から体調を崩す日が多くなってきて、
野十郎自身は、そのまま人知れず死んでいくことを望んでいましたが、
心配した周囲の人の計らいで、最期は老人ホームに入所し、まもなく亡くなりました。

坂本 自ら付けた名前・野十郎の名の由来である「野垂れ死ぬこと」を、最期まで貫こうとしたのですね。
そんな野十郎が、魂をこめて制作した作品の数々をぜひたくさんの方に見てもらいたいですね。
久留米市美術館の中山さん、4回にわたって興味深いお話をありがとうございました。
久留米市美術館では、生誕130年を記念して「高島野十郎展」を4月4日まで開催しています。
次回は、からくり儀右衛門こと『田中久重』をテーマにお送りします。
おたのしみに。